

生誕 70 周年記念 阿部直昭展 大地に芽吹く

【会期】2024年4月12日—5月19日

【協力】一般財団法人 阿部美術振興財団

※会場の作品はすべて写真撮影が可能です。
※作品にはお手を触れないでください。
※会場内での飲食、喫煙はご遠慮ください。

阿部直昭は筑豊を代表する画家の阿部平臣の後を継ぎ、自身も中学校の美術教師や阿部絵画教室の指導者として地域の美術振興に貢献し続けてきました。本展では、卒業制作から最新作まで幅広い年代の作品を通して、画業を振り返ります。創作の原動力となっている流木などの自然物や荷馬車、さらには画家自身が生み出した不思議なオブジェとともに、阿部直昭の力強い制作に迫ります。

【サテライト展示のご案内】

会期中、当館のほかにも直方谷尾美術館（4月20日—6月2日）、ギャラリー豊you（4月23日—5月19日）にて阿部直昭氏の作品をご覧いただけます。当館の展示ではご紹介しきれない個性豊かな作品群をお楽しみいただけます。

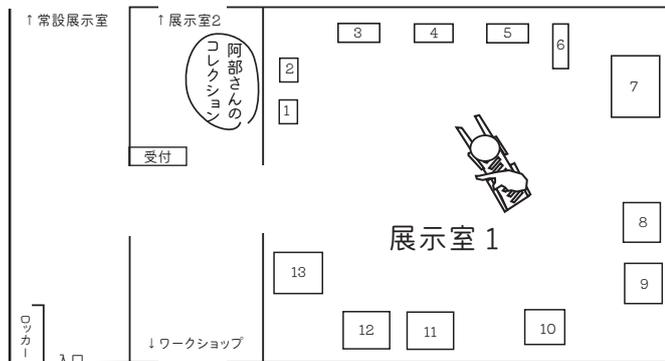
直方谷尾美術館

〒822-0017 福岡県直方市殿町10-35



ギャラリー豊you

〒825-0015 福岡県田川市伊田町14-8
伊田商店街内



1 幼少期の記憶 自然の造形に惹かれて

■ヨーロッパの風景

1. 《ウインドウショッピング》
油彩・画布、72.7×91.0cm、制作年不詳、「阿部直昭 作品展～大地に触れ、共に生きる～」(小倉井筒屋、2023年) 出品作

2. 《モンマルトルの絵描き》
油彩・画布、60.6×91.0cm、制作年不詳

■花に込めた思い

3. 《究極の形の誕生・彩壁》
アクリル・パネル、121.5×242.0cm、制作年不詳

4. 《初夏の風》
アクリル・パネル、90.0×182.0cm、制作年不詳

5. 《極楽鳥花》
油彩、アクリル・パネル、71.5×183.0cm、2023年

6. 《カラー》
油彩、アクリル・パネル、183.0×71.5cm、2023年

■大地に芽吹く

7. 《彩壁》
油彩、アクリル・画布、193.9×259.1cm、1990年、第34回安井賞展賞候補

8. 《21世紀へ 大地からの恵み》
油彩、アクリル・画布、162.0×162.0cm、1999年、第6回別府現代絵画展大賞、別府市美術館蔵

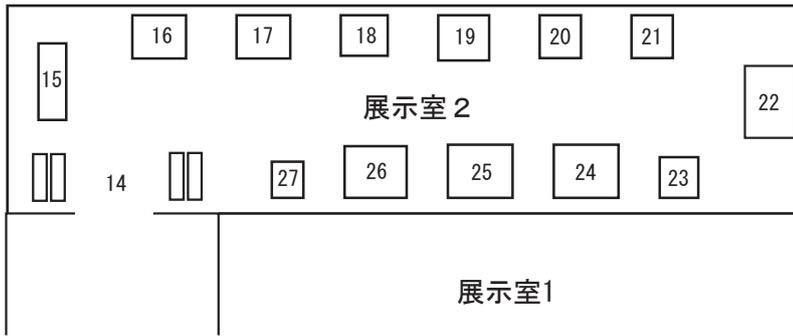
9. 《収穫 大地からの恵み》
油彩、アクリル・画布、162.0×162.0cm、1997年、熊日総合美術展—21世紀アート大賞'98 文化協会賞

10. 《何処へ行くの?》
油彩、アクリル・画布、193.9×259.1cm、1997年、第51回行動展、第40回安井賞展 出品作、田川市美術館蔵

11. 《彩壁 III》
油彩、アクリル・画布、194.0×259.0cm、1987年、第42回行動展出品作

12. 《彩壁 I》
油彩、アクリル・画布、194.0×259.0cm、1987年、第42回行動展行動美術賞

13. 《生きる》
油彩、アクリル・画布、184.0×230.0cm、2022年、第77回行動展出品作



2 踏まれ、芽吹く 大地を描く

14. 《大地より》

アクリル・パネル、181.0×71.2cm、四連画

15. 《人物》

油彩・画布、133.0×356.0cm、1979年、武蔵野美術大学卒業制作

16. 《彩壁Ⅲ》

油彩、アクリル・画布 194.0×259.0cm、1986年、第41回行動展新人賞

17. 《列 No.2》

油彩、アクリル・画布、181.0×227.0cm、1989年、第10回天展道友社奨励賞

18. 《大地への思い》

アクリル・画布、130.3×193.9cm、1996年、田川市美術館蔵

19. 《大地》

油彩、アクリル・画布、197.0×197.0cm、1998年、第13回現代日本絵画展朝日新聞社賞

20. 《大地からの恵み》

油彩、アクリル・画布、197.0×197.0cm、1998年、第7回青木繁記念大賞公募展わだつみ賞

21. 《大地からの恵み》

油彩、アクリル・画布、197.0×197.0cm、2002年、第11回青木繁記念大賞公募展出品作

22. 《大地より生まれ大地に還る》

油彩、アクリル・画布、197.0×262.0cm、2003年、第58回行動展、第12回筑豊洋画作家展出品作

23. 《大地から》

油彩、アクリル・画布、162.0×162.0cm、2004年、第13回英展出品作

24. 《大地からの恵み》

油彩、アクリル・画布、194.0×262.0cm、2011年、第66回行動展、第5回北海道現代具象展出品作

25. 《Leading Enovation》

油彩、アクリル・画布、197.5×261.5cm、2015年、公募団体ベストセレクション美術2016出品作

26. 《新しい何かが生まれて》

油彩、アクリル・画布、197.0×262.0cm、2017年、第72回行動展出品作

27. 《彩壁》

油彩、アクリル・画布、130.3×130.3cm、2022年、第76回福岡県美術展覧会 美術協会創立80周年記念賞

阿部さんのコレクション秘話



■アリの絵が描かれた石

子どもの頃に、アリの眺めているのが好きだったという。大学生のときには、アリの感光紙の上に置いて写真を現像したこともあった。



■スズメバチの巣

アトリエの天井にあったスズメバチの巣。ハチの巣を壊そうとしていた業者さんに「待ってください!」とお願いして、引き取ったもの。他にも知人からもらうなどして、家には5~6個のハチの巣がある。



■流木の曲線のオブジェ

流木の曲線を生かして、楽器や試験管を洗うブラシを組み合わせてつくられたオブジェ。楽器はとんがりぼうし、ブラシは髪に見立てている。



■ホルンと流木のオブジェ

宗像の海岸で拾った流木に、ホルンのペルを切ったもの、碇子（がいし、電柱の電線を支えている白い部品）などを組み合わせてつくったオブジェ。材質の違うものを組み合わせるような試みをおこなっている。



■流木と荷馬車

子どもの頃、石炭風呂に使う石炭を運ぶ荷馬車がよく家を訪れていたという。荷馬車をひいていた馬は家のアオギリの木に結ばれて、積まれてきた石炭は近くの桶に入れられた。その思い出が忘れられず、大人になって荷馬車を探していたところ、譲ってくださった方がいたため購入。

流木は遠賀川に流れ着いたもの。家にはたくさんの流木のコレクションがある。



■ヤシの葉っぱ

阿部絵画教室の建物の近くに植えてあるワシントンヤシの木から落ちた葉。風が強い日の翌日に地面に落ちているという。ヤシの木は阿部直昭さんの小さいころ、父の平臣さんが植えた。入れ物は学校の給食をつくる鉄鍋。



■麦

泡盛の壺に麦を入れたもの。この麦は2000年にアトリエに置かれたもので、現在までずっと飾られてきた。

さがしてみよう!



●ラーメンのどんぶり模様

おなかですいた時にラーメンが食べたくて描きました。



●あり

ありが好きで小さいころは、ずっと眺めていました。



●蹄鉄（ていてつ）

馬のひづめを保護するためにつけられるU字型の保護具。画面の中で異なる素材を組み合わせることを試みています。



●麦

踏まれて強く育つ麦の姿に力づけられました。画面には金色のきらきらした材料が使われています。絵画教室で子どもたちの発想からヒントを得ました。

作家のことば

(福岡県立鞍手高等学校の同窓会でのトーク原稿)

■麦に対する思い

こんにちは、私は鞍陵 25 回卒業の阿部直昭と言います。当時の担任は、音楽の田中秀明先生でした。私の成績はいつも 10 番以内を占めていました、最後からですけど。

進路指導でいつも担任から「阿部、お前今の成績だったら行く大学ないぞー、お前の親父が絵描きだったら美大に行ったほうがいいんじゃないか」と言われていました。

2 年間の浪人生活の後武蔵野美術大に入学し卒業後 1 年半の海外を歩き回る旅をし、帰国後地元直方で中学の美術教師をしていました。

美術教師を続けながらいろんな絵画コンクールや公募展に出品していました。1997 年の冬に久留米市の石橋美術館で行われる青木繁絵画大賞展に 1tトラックを運転して搬入しました。

自分としてはかなり満足いく出来栄で少なくとも入選か良ければ入賞するのではないかと自分自身勝手に思っていました。

審査の後、数日して我が家の郵便箱に審査結果がきました。恐る恐る封筒を開けるとそこには予想に反して落選の文字があり大きなショックを受けました。

落選した作品は引取りに行かなくてはなりません、その日は指定してあり、会場に行けば落選したということがわかります。

知った人に会わないようにと祈りつつ行くのですがそういう時に限って知り合いの絵画運送屋に会いニヤッと笑われました。(気のせいかもしれませんが)

落胆し惨めな気持ちで自分の作品をトラックに積み込み久留米の美術館を後にしました。

直方に帰る途中、久留米の郊外は穀倉地帯で 2 月の寒い中、麦踏みが行われていました。どういう訳か私が小さいときよく父親から「麦は芽が出たとき寒い中踏

まれなければ大きく元気に育たない」と聞いていたことを思い出しました。この時は目の前の麦踏みの光景から私も落選したことが踏まれて惨めだと思いました。

それから 4 ヶ月後の 6 月、通っている中学校の生徒指導で晴れた夕刻家庭訪問しなければいけませんでした。

遠賀川の堤防を車で走っていたら堤防の下に見える鞍手町の広大な麦畑に麦が風に吹かれてなびいていました。

それはトトロの猫バスから見たような風の道がきれいな夕日に反射して幾重にも重なって「美しい！」と思いました。絵に描いてみようと思いきや車を止め堤防を駆け降り麦畑から麦を数本失敬しました。

家に帰った後油絵で描いてみると上手くかかまして「これはいける」と直感しました。

翌年 1998 年の青木繁絵画大賞展に麦の束を構成した 120 号の作品を出品しました。見事、「わだつみ賞」を受賞しました。

その翌年 1999 年、別府現代絵画大賞に麦のシリーズ 100 号を出品したところ見事最高賞を受賞することができました。この絵は麦と背景に工夫を施し和紙を画面に貼り付けコラージュしたものです。ただ和紙を貼り付けただけならハサミで切った所がはっきりとしていていかにも貼り付けましたとわかるので貼ったとわからないようにするため和紙の切れ端からマッチで火をつけ、ある程度したらバケツの水につけて焦がした輪郭の面白さを考えて貼り付けて画面に工夫の跡を数多く残した作品です。

その翌年 2000 年に東京銀座の日動画廊が主催する昭和会賞展に、同じく麦シリーズを出品したところ、これ又最高賞の「昭和会賞」を受賞し日動画廊で個展のチャンスを与えられました。

後にこの日動画廊で個展をしたところ多くの知り合いが見に来てくれ、中でも鞍手高校の同級生が 20 名ほど集まってくれ祝ってくれました。中でも H 君は「阿部

は高校時代成績が一番悪かったけど今では俺たち同級生の中で一番目立とうぞ」と言った言葉が嬉しかったし麦を大きなテーマにして本当に良かったと思いました。

それから何年かして<美術の窓>という美術情報誌の編集部から私の絵の技法を本の中で紹介したいので協力してくれませんかという誘いがありました。

美術の月刊誌で私の麦の大作の制作過程を写真入りで 6 ページに渡り紹介するというものでした。発売が 2001 年の 3 月中旬でした、その発売を心待ちしていた 3 月 11 日にあの東日本大震災が起きました。この地震で日本中が大パニックになりました。

この混乱の後しばらくして神戸に住んでいる人物から、<美術の窓>であなたの麦の絵を見ました、麦は寒い時に踏まれて大きく育つものです、いま東日本はパニック状態ですが神戸も阪神大震災の時は大きな災害を起こし苦しみの中から立ち上がりました。

この日本がこんな苦しい状態の中で立ち上がって頑張ろうという気運をたかめたので、あなたの麦の絵を神戸の大きな施設、ホテルオークラ、全日空ホテル、北野クラブ、神戸空港、神戸がんセンターなど 15 箇所に飾って神戸の人たちに見てもらいたい。という申し入れでした。この人物は関西でとても影響力のある人でした。私は快く受け入れ寄贈させてもらいました。

自分の絵が見てくれた人の心を打つという素晴らしいこの経験を決して忘れないように心がけ絵を描くことに専念しようと心に刻みました。

現在もまた自分に甘い生活ですが頑張っていると思っています。

作家のことば

(2005年10月の個展に際して)

私のアトリエの中には、昔、荷物を運んだ馬車がでえーんと居座っている。

その上に遠賀川に転がっていたとても大きな流木が載っている。

これは私がかかなり気に入っている光景である。

これらは、アトリエの一員となった日からすごいパワーをもらって描いている。

わたしは自分の絵をうまいと思ったことはない。むしろ下手だと確信している。

ただ、50歳になるまで絵を続けられたことはある人の言葉が強く残っていたからだ。

学生時代にアルバイトをしていた大学近くの食堂に山口長男先生がよく来られて、大学の先生方と一緒に酒を飲み、最期まで自分を失わずよく絵の話をされていた。ある時その食堂で私たち学生に絵について話をさせていただくチャンスがあった。

『絵は自然と同じだよ』『風雨にさらされない樹木は、幹は真上に伸び、根は真下に伸びる』『断崖絶壁の木の幹は風の方向に傾き、反対方向に根がびっしりと張っていく。』『絵も同じだよ。こちらが強く感じれば、反対方向にバランスのよい配置をすればいい。自然に描くことでいいんだよ。』

わたしにとって神様のような山口長男先生の言葉が今でも心の中に生き続けている。『自然でいい絵が描きたいなあー』と思っているこのごろです。

略歴

- 1954 7月16日福岡県直方市生まれ
- 1979 武蔵野美術大学造形学部油絵学科卒業
- 1987 第42回行動美術展行動美術賞(85年奨励賞、86年新人賞)
- 1991 第34回安井賞展賞候補
- 1998 第7回青木繁大賞展わだつみ賞
第13回現代日本絵画展・宇部ビエンナーレ朝日新聞社賞(第7回、第16回佳作)
熊日総合美術展 21世紀アート大賞'98 県文化協会賞(99奨励賞)
- 1999 第6回別府現代絵画展大賞
- 2000 第35回昭和会展昭和会賞
- 2015 第9回北海道現代具象展(市立小樽美術館・北海道、16年第10回展にも出品)
- 2016 公募団体ベストセレクション展 2016(東京都美術館・東京)
開館25周年記念アーティストの反骨精神「沸点」(田川市美術館)
- 2021 第76回福岡県美術展覧会 美術協会創立80周年記念賞

現在 行動美術協会会員、福岡県美術協会会員
一般財団法人阿部美術振興財団 代表理事

主な収蔵先

直方市役所、直方谷尾美術館、田川市美術館、別府市美術館、神戸空港、ホテルオークラ、がんセンターなど15の公共施設に収蔵

■主要参考文献

1986年5月7日「具象、抽象ほぼ半々 パラエティーに富む 巡回「行動展」『朝日新聞』
今展の最大の収穫は、初出品で奨励賞を得た阿部直昭の「列…C」だろう。砂漠を連想させる空間に、上から見たピラミッドのような形の列が五つ、のびたり曲がったりしている。宇宙から見た地上のようでもあり、古びた扉の一部にも見える。具象と抽象、巨視と微視が混交した不思議な世界だ。とくに、その絵づくりの巧みさには天性のものを感じさせる。

1986年5月23日「応接室 北九州絵画ビエンナーレ展で秀作賞」(掲載誌不明)
「壁」をテーマにした作品を描いている。「特に漆喰ですね。壁ににじみ出た前のシミ、カビなどの汚れ方に興味を持ちました」[中略]阿部さんは、「鋳と壁」がテーマの彩壁Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの三部作で初挑戦。今回は大賞受賞作がなく、準大賞、優秀賞に次ぐ秀作賞に彩壁Ⅲが食い込んだ。「受賞を知った時？そりゃ、もう、うれしかったですよ」と素直に喜びを表現する。「ⅠとⅡは百五十号の大作。彩壁Ⅲは約百二十号と小さめですが、Ⅰ・Ⅱに負けない迫力があつた」と自己分析。行動美術協会会員の阿部平臣を父に持つ。幼いころから数多くの作品に囲まれ「少なからず影響を受けたようです」。

1987年5月19日「行動美術展から」『西日本新聞』
「彩壁Ⅲ」阿部直昭
快テンポ。昨年、初出品して初入選、さらに奨励賞をさらったうえ行動美術選抜展展示などで派手な話題をまいたが、こしは新人賞を射止めた。昨年の茶からグレーに変わった画面は色彩を抑え、壁土か地面を思わせる絵肌に流動感が加わった。これまでリズムカルに並んだ四角錐のビョウ状の表現が数を減らし、代わりに小さな球体が散る。

1988年6月3日「行動展から<中>」『西日本新聞』
「彩壁Ⅱ」阿部直昭
しみや傷がある古びた壁に打ち込まれた大小の鋳とその影の列が、さわやかなリズムを刻む。大理石の粉を混ぜたアクリル絵の具を吹き付けたり、筆を振ってたたきつけたりして作った絵肌は本物の壁のようだ。「五十四年に武蔵野美大を卒業して一年半ほどヨーロッパを回った。その時、日本とは全く違う壁に目を

奪われ、逆に日本を強く意識した」以来、日本の壁を描き前回新人賞、今展で行動美術賞と活躍が目覚ましい。

1990年3月(日付・掲載誌不詳)「美術 阿部平臣・直昭展」
阿部直昭はこの五年間、ひたすら壁ばかり描いてきた。安井賞展や北九州絵画ビエンナーレなどでも評価された「彩壁」シリーズだ。この間の大作を一堂に見ると、具象と抽象のはざまを探索しながら、ギリギリのところで具象に踏みとどまっているのがわかる。その画面は、鋳や球体、鉄さびなどを描いた広大な空間から成っている。いくつかの鋳や球体の並列は、無機質なようで、淡い情緒があり、リズムカルだ。地肌を描いた部分は、大理石粉を使ったマチュールが雄弁で、灰色を基本にした微妙な色彩の変化にリアリティーを持たせている。物質感の強い画肌、同形態の繰り返し、計算された構成などが、かろうじて「壁」を現出させる。いわば、バラバラな形が、一つの有機的なつながりを持つ瞬間をとらえようとして絵画だ。

1992年9月20日「[展覧会] 梶原藤徳展・阿部直昭展 福岡市」『西日本新聞』
阿部は壁の染みを主題に「彩画」の連作を描く。北九州ビエンナーレ、現代日本絵画展、西日本美術展、安井賞展などコンクールや行動展で目覚ましい活動をする新進。大作十四点と水彩を展示。
ざらつきがあり、本物のような質感を持つ灰色や茶色の壁に染みが広がる。朽ちかけた壁に古びた四角いびょうがならんで打ち込まれたり、装飾古墳の文様のような形状があったりして、古い昔を思わせる。朽ちてゆく物への哀惜がある。
ところが、壁にはそれだけが鮮やかな緑や紫色の玉が浮いていて非現実的な夢のような世界である。壁や染みの色彩は決して美しくはないが、びょうや玉体たちと響き合い、清澄な宇宙を作り出す。

1994年9月29日「谷尾美術館大賞展入賞作品・直方市<2>福岡-連載」『西日本新聞』
【奨励賞】阿部直昭(40)=直方市感田「彩壁」(洋画、S100)
この十年は壁をモチーフに描き続け、大学時代のグループ展の名前から取った「彩壁」で通しています。京都の寺院の壁に打つてある

びょうやしつくいについた染みなど、壁を意識してきました。
ちょうど十年ひと区切り。これから内容を変えていこうと思っていた矢先の受賞だけに、自信になったし、自分にとっての転換点ともいえます。次のテーマはまだ私の頭の中にあるといった段階ですが、今の延長線上にあって形態の方にウエートを置いた展開を試みたいですね。

1996年1月13日「直方市の阿部さん個展、市立美術館 北九州」『西日本新聞』
「大地」シリーズは、ほとんどが大きなキャンバスに力強いタッチで描かれた壮大な作品。阿部さんは「阪神大震災やオウム事件などで昨年、社会は混迷を深めた。自分なりに新しい社会を切り開いていくイメージで描いた」と話している。

1996年11月8日「独自の方向性を発揮、レベルは着実に向上、谷尾美術館展の審査から」『西日本新聞』
もう一方の優秀賞(直方市長賞)は、直方市感田の阿部直昭さん(42)の「どこへ行くの? No.2」。赤い大地の上をほうアリの群れを、未来に向かって歩む人間の姿に重ね合わせた。大津さんは「全体的に抽象的なつくりでありながら、細かいアリを描くことで従来にない絵画のかたちを見いだしている」と、意欲的なねらいを買った。

1999年1月27日「[第6回別府現代絵画展]が開幕、大賞は阿部直昭さん一一来月14日まで/大分」『毎日新聞』
大賞(賞金300万円)に決まった福岡県直方市、阿部直昭さんの作品「21世紀へ 大地からの恵み」は「チューブや有刺鉄線が暗示的で、白地の生かし方がいかにも巧み。前回より飛躍的に良くなった」との評価を受けた。

2000年2月16日「具象若手美術家の登竜門展 昭和会賞に直方の阿部さん 油彩「大地からの恵み」『西日本新聞』

具象の若手美術家（絵画、彫刻）の育成を目的にした第三十五回昭和会展の昭和会賞を、福岡県直方市感田の洋画家、阿部直昭さん（45）＝行動美術協会会員＝が受賞した。[中略]阿部さんは、「大地からの恵み」と題した油彩三点（50号と10号二点）。抽象のマチエールに、生命感あふれる麦、穴、鎖などを配している。三回目の招待で受賞した阿部さんは、「自分の方向が間違っていなかったという安心感の一方で、次が大事なのでしっかりしなきゃあ、と考えています」と語った。

2003年2月17日「近況往来＝画家・阿部直昭さん「生きる喜び」を込めたい／文化」『西日本新聞』

一月に福岡と東京の日動画廊で個展を開きました。第三十五回昭和会賞の受賞記念展です。東京では初めての個展で、作品は福岡よりも多い約六十点。大地シリーズの「収穫」をはじめ、実る麦やガマの穂、農機具を題材にした近作を展示しました。

土や植物にはたくましい生命力を、農機具には極めて機能的な美しさを感じます。興味をひかれるままに、鎌や鋤（すき）、唐箕（とうみ）などを集め、今はアトリエの中に古い馬車も。眺めていると「絵画表現も、ここまでシンプルにしなきゃいかんのかなあ」と考えさせられます。

麦を中心としたシリーズを描いて五年ほどになり、少し画風を変化させるつもりです。展覧会に出す作品は自分の主張をぶつけることが主眼でしたが、今回の個展を通じて、自分のメッセージを鑑賞者に伝えることを意識しました。そのためにもインパクトのある素材で、もっと画面構成を簡素化したすっきりした絵を、と考えています。

私は「生きる」というテーマを凝縮した作業が絵を描くことだと思います。勤務先の中学校で二年前から、知的障害児の美術教育に携わっています。感情をストレートに表現する彼らに、ごまかしは利きません。

絵を描かせると私の作品など吹っ飛ばすエネルギーがあり、教えるどころか教えられることばかり。教壇に立って二十年以上たちますが、教育の原点に触れる気がします。子どもたちに「生きること」を絵で表現してみせられたらいいですね。

2003年5月25日「福岡県／机再生し額縁に阿部さんが個展 きょうまで福岡市／ふくおか都市圏」『西日本新聞』

阿部さんは、学校の不要品処分の担当。焼却処分していたが「もったいない。もう一度、机に命を与えたい」と、カンナやノコギリを使って額縁にした。

展示作品は枯れたハスや麦の穂、それに壁をモチーフにした抽象作品など約四十点。ハスは五年前、亡くなった義母の初盆のときに供えていたものを大切に残して、描いたという。作品が黒く塗った額縁とマッチしており、訪れた人たちの間からは「美術の先生らしいアイデア個展ね」。

2006年7月25日「近況往来＝介護・療養の中で発見 画家・阿部直昭さん」『西日本新聞』

昨年冬、突然難聴になって二十四年間勤めた中学校の美術教師を退職し、今春から九州産業大学非常勤講師として週一回、デッサンを教えています。五月には行動美術協会を引っ張っていた父・平臣が亡くなりました。八十五歳でした。早いもので、まもなく初盆です。本当にあわただしい一年が続いています。

二十五日から三十日まで福岡市・天神二丁目のギャラリーおいしで開く個展では、その間に描いた「大地シリーズ」を並べます。自分の療養、父の介護などもあって、身近なものを丁寧に写生することを心がけた作品です。ベニヤ板にアクリル絵の具で描いたガマの穂や梅、ハスの実など静物を中心にしています。日本画のような感覚にも見えますが、下地のマチエール（絵肌）に何回も絵の具を重ねて削ってみると、おもしろいものになりました。新しい発見でした。

2007年12月6日「欧州田舎風景画展：直方の阿部さん、小倉井筒屋で」『毎日新聞』

直方市の画家、阿部直昭さん（53）が個展「ヨーロッパ田園風景シリーズ」を小倉北区の小倉井筒屋新館美術画廊で開いている。11日まで。阿部さんは美術教諭として直方市の中学校に勤め、現在、九産大と九州造形短大の非常勤講師。昨年亡くなった父、平臣さん＝元筑豊美術協会会長＝の跡を継ぎ、直方、福岡両市で絵画教室を主宰する。20代に1年半滞在したヨーロッパの風景に魅せられ、なかでも風雪に耐え生活感のある農家の壁をモチーフに「彩壁」シリーズを描いてきた。6月にはスペイン、ポルトガルを訪れ石造りの農家やのどかな田園を取材。その時の作品を含むサムホールから30号まで油彩40点を展示している。15万円から即売もする。阿部さんは「色の境目がない、柔らかな表情を見せる農家の壁は、

風景にとけ込み、日本のしっくい壁にも似て美しい」と話している。

2011年11月「行動展9～10室」『美術の窓』

阿部直昭「大地からの恵み」。黒いバックに巨大な津波の跡のようなフォルムが置かれる。それに対して麦の穂が垂直に立ち上がる。麦は踏まれることによって丈夫に育つと言われている。そういった麦をメタファーとして、今回の日本の困難ともいうべき大災害から立ち上がることを祈る。そんな祈りのモニュメントと言ってよい表現である。背後の横のブルーは海の象徴だろう。恵みの海であると同時に、狂気の、あるいは悪夢のような暴力的な性質をもつ、両面性をもつ海。その神秘的イメージを、この青いストライプで表現した。

2015年10月22日「福岡県／「流木はアートだ」自然の造形そのままに6点 直方市の遠賀川河川敷に展示／筑豊」『西日本新聞』

直方市溝堀の遠賀川河川敷に大きな流木6点が展示され、通行人の目を引いている。遠賀川の増水などで流れてきたもので、自然に削られてできた独特の造形はアート作品のよう。展示をプロデュースした同市感田の画家阿部直昭さん（61）は「竜やセイウチに見えるものもあり、それぞれが自分の中でイメージを浮かべてほしい」と話す。

2023年10月22日「福岡県／直方・阿部さん北九州で作品展 大地に咲く花など描く きょうまで／筑豊」『西日本新聞』

直方市在住の画家、阿部直昭さん（69）が、自宅で育てるハクモクレンなどをモチーフにした油彩画など約60点を展示する「阿部直昭作品展～大地に触れ、共に生きる～」が、北九州市小倉北区の小倉井筒屋新館7階で開かれている。29日まで。

阿部さんは武蔵野美術大学造形学部油絵学科卒。学生の頃、父親に促されて始めた畑仕事を続けるうちに、大地のエネルギーを感じ、「大地」をテーマに描くようになった。

今回展示しているものも、大地に根ざした植物などを、軽い質感のアクリル絵の具と艶のある油絵の具で表現。金色や黒色で力強く塗った下地に、生き生きと咲く花を描いた作品「極楽鳥花」などが並んでいる。

阿部さんは「大地と向き合ってきた私の生きざまを感じてほしい」と話している。